
慈 恵



平成28年 秋季号

No.56

宗教法人 慈 恵 院 付属 多摩犬猫霊園

鑑賞



出入無事

百也二俣太郎書

老子は「大巧は拙のごとし」というが、この「出入」の「出」などは一見拙に似て、まことに大きく味わい深い。古拙とは、このことか。「入」は気合に乗る。

一〇二歳の田中が、何ものにもとらわれず、全体作用した。その自由なはたらきこそ「無事」の内容だろう。

全般にこの作は渴筆となったが、決して肌は荒れず、よく潤う。落款も自由に、一段の拡がりを示す。

「禅画報」より

【平櫛田中】（一八七二〜一九七九）木彫家。本名、俣太郎。岡山県生れ。高村光雲らに学び、岡倉天心に影響を受けた。日本美術院同人。東京美術学校教授。文化勲章受章。

おどけ善光、みかんを食べる

秋、紀州路をあんぎや行脚するひとりの僧がいた。善光和尚である。

たわわに実ったみかん林の下を歩きながら、ふと足をとめた。そして、みかんを上げしげと見つけている様子を見ると、どうも初めて目にしたものらしく、みかんがどういふものか知らないようである。

その和尚の姿を見ていた農夫が、ひとつもぎとつて善光に与えた。すると、

「これは何というものじゃ」と善光がたずねるので、

「みかんというものですよ」といつて、皮をむいて食べる方法まで教えてやった。

「うまい、うまい」と舌鼓して食べ終わると、善光は農夫が捨てたみかんの皮を拾い集めて、行李の中へしまいこんだ。

「それは食べられませんよ。捨てていきなされ」と農夫が注意すると、善光は首をふって、

「いや、この皮は日光に乾して薬にするんじやよ」といつて立ち去った。何も知らないお坊さんだと思っていた農夫は、あつ気にとられながらその後姿を見つめていた。

「禅門逸話集成」より

善光 (生没年不詳)

曹洞宗。安永、天明ごろの人という。

秋ごよみ

11 月	10 月	9 月	
		9 / 25 明け <small>(秋分の日)</small>	当山行事
		9 / 22 中日 <small>(秋分の日)</small>	彼岸会
		9 / 19 入り	
			二十四節気
		9 / 7 白露	
		● 蜘蛛の囀の穂草をつづる 白露かな(順園)	
		9 / 22 秋分	
		● 秋分やもみづりはやき 岩蓮華(那須弥生)	
		10 / 8 寒露	
		● 暦はや寒露の蘭の 花の濃し(三田青里)	
		10 / 23 霜降	
		● 霜降や羽ふるひやまぬ 水の鶴(北谷生)	
		11 / 7 立冬	
		● 立冬や冷たき柿を 掌にしたる(滝春一)	
		11 / 22 小雪	
		● 小雪や古りしたれる 糸桜(飯田蛇笏)	
		11 / 3 文化の日	
		11 / 15 七五三の祝い	
		11 / 23 勤労感謝の日	
		10 / 13 十三夜 <small>(後の月)</small>	
		10 / 10 体育の日	
		9 / 19 敬老の日	
		9 / 15 十五夜 <small>(中秋の名月)</small>	
		9 / 9 重陽の節句 <small>(菊の節句)</small>	
			祝日等

「こよみ事典」東京美術 参考



大好きだよ トム

府中市 小勝 友香(9)

私がかつていた犬は、「トム」という名前です、とてもかしこい犬でした。

毎年、3月11日になると、トムの事を思い出します。そう、トムは、あの大しんさいの前の日に、亡なつてしまつたのです。18才でした。私は、いつも見守つてくれていたトムに、手紙を書きます。

「とむちゃんへ」

ゆか、もうすぐ4年生になるんだ。

そう思うと早いね。勉強

が始まつて、どんどんむずかしくなつていくけど、がんばつていよ。友だちも、たくさん出来て、学校はとっても楽しいよ。

とむはどう？天国で新しい友たくさん出来て、楽しく遊んでいよ？もし、そうだったらうれしいな。

弟のもつくん(もく)は、元気にしているよ。でも、歩くのが、つらくなつてきているみたい。もうすぐ6、16才だからね。

とむちゃん、これからも、ゆかたちの事、見守つていてね。

とむちゃん、大好き。

DNAが活きるのか

小平市 高島 順風(86)

鶏好きの親父は、飼育鶏の

世話で時を忘れ学校に遅刻をしたとか。現役が済んで何がしかの分与を受け上京。下町で生活をするが、今度は家禽にのめりこみ、鳥なかまとの交流で、十姉妹などの竹籠をふやして散財、大正の時代に十姉妹の白が百円もしたと聴かされた。

その息子は、伝書鳩に熱をあげ親に反対されたが、何とか資金をつくり鳩を飼育した。しかし戦争がはげしくなると、飼料の購入が困難となり遂に手放すことになつた。出来ることなら動物園で働きたかつたが、時代が許してくれなかつた。

ある時、入学前の娘がしゃがみこんで、何かをジツと見つめていた。アリの行列を観察していたのだ。庭にいるカマキリや山椒につくアゲハの幼虫などに興味をもって眺め

ていた。その後わたしが鶏を飼育すると、何かにつけいい助手を務めてくれた。

家禽類の飼育も魅力はあるが、やはり犬の飼育がしてみたい、叶わぬことながら大型犬に夢がある。仕方がない人様の散歩犬や品評会などを見て満足していた。

何時の間にか、アリを観察していた娘が三人の母親となり、末っ子の入学を期に社宅から新築住宅に転居することになつた。

そこで古稀過ぎの老夫婦は、大奮発の祝儀袋を渡した。何と、それは血統書付きの犬となつてしまつた。何でも五人家族の合意で長年の希望であつたとか。祝儀の用途に注文はないが、老夫婦の価値観をなげいてみた。

さて、娘に伝えたことは、世間の飼育事例からすると、

子供の要望で犬を入手し、最初は子供達が積極的に世話をしますが、学業等が忙しくなる

と親に依存し、母親の負担が重くなる。この辺を覚悟して犬を欲求不満にさせないよう、家族の一員として世話をしてほしいと望んだ。

可愛いかつた子犬は、今年十三才となる。

世話は、両親と三人姉弟の交替制が守られている。それに飼主は、長女と犬が認識しているようだ。

三人が大学生となり、学業もバイトもそれなりにやっています。長女がまあの大学を卒業、まあまあの会社に、就職

することを予測していたら、動物に関連する会社に合格。澁刺と通勤している。

間の幸せのため、最後までいい関係で終活できるよう、たのしんでリーダーを務めてほしいと爺婆は願っている。

ラブと過ごして

立川市 鈴木 裕子(50)

梅の花が咲き、春の訪れを感じ始めた平成二十八年二月六日に愛犬ラブは十四歳と十ヶ月の生涯を閉じました。娘が小学二年生、息子が保育園年長の頃、ペットショップに行き、トコトコと唯一近寄ってきた子犬が生後三ヶ月あまりの黒ラブでした。

私は大型犬は散歩も大変だし、旅行とか連れていけないし・・・と思いましたが、夫は近寄ってきたのはこの犬だけだと気に入り、店の人もラブドールは大人しく利口で

すから心配ないですよとの薦めで、その日のうちに抱いて帰ってきてしまいました。

確かに子犬は可愛く誰もが夢中になりましたが、共働きの我家では帰宅して驚くことの連続。長い時間ゲージでは可哀想とダイニングで自由にさせていたら、スリッパはボロボロ、新築の家、だつたのにドアや柱はかじられ泣けてきました。今ではその傷跡を見ると子犬のラブを思い出し違う意味で泣けてきます。風邪で学校を休んで一人留守番していた小学生の息子に「大丈夫か？」と遠く離れた祖父が心配して電話した時、「ラブ

がいるから寂しくないし大丈夫」と息子が答えたそうです。学校から帰宅して誰もいない家に帰るのは寂しいけれど飼い主の帰宅をいまかいまか待ち、本当に喜んで（おかえ

り）と迎えてくれたラブの存在はどれほど心の支えになったか計り知れませんが。

いたずらでやんちゃだったラブも落ち着く年代になった時は、本当に利口で大人しく全く吠えず、人は大好きで癒しそのものでした。病気もせず獣医にかかるのは耳の掃除とフィリアアの検査くらい。

花見をしたり、夏は海に行つて泳いだり、キャンプへ行つたりと沢山楽しみました。そんなラブも十四歳を過ぎた頃から足腰がふらつき、亡くなる二週間前には全く動けなくなりました。それでも食欲があるうちはよかつたのですが、大好きなチーズも無視し（おかしいな）と思つたその日の明け方、添い寝していた息子に見守られ安らかに立ちました。ラブ本当に幸せな日々をありがとう。